【連載】
# 北のサクラ彩る 歴史と文化

第3回



## 函館のソメイヨシノ〈上〉

森林インストラクター
**小沢　信行**（おざわ　のぶゆき）

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として小樽、釧路、函館などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。2016年森林インストラクターの資格取得。現在、日本森林インストラクター協会会員、道新文化センター講師。

今や日本でサクラといえばソメイヨシノを思い浮かべる人がほとんどです。江戸時代末期に東京で生まれた園芸品種で、明治時代に全国各地に普及します。

当初は「吉野桜」と呼ばれていました。桜の名所、奈良県吉野に自生するサクラとは形態が異なることから1900（明治33）年、研究者が「染井吉野」と命名します。しかし、この名前はなかなか浸透せず、大正時代になっても吉野桜といわれることが一般的でした。

そんな人気のサクラが1890年代、実業家の手で函館へ大量に持ち込まれ、函館山一帯に植えられます。これが契機となり、「北海道でソメイヨシノといえば函館」と広く認知されるようになるのです。

### 函館山に5万本植樹

功労者は信濃国（現長野県）出身の逸見小右衛門です。1868（明治元）年、20歳の時に函館へわたり、菓子作りを手掛け後に、原料の砂糖、麦粉の販売で才覚を発揮し、財を成します。

その一方で注力したのがサクラの植栽でした。函館区会議員に当選した1889（明治22）年、亀田川堤防にウメ、サクラ計561本を植えます。

夢はさらに広がり同年、函館山に5万本のサクラを献植する願いを函館区に提出します。1890（明治23）年の5千本を皮切りに1895（明治28）年まで、毎年3千～1万3千本のソメイヨシノを植え続けました。



函館山を背にした函館公園に咲くソメイヨシノ



逸見小右衛門の肖像（函館市中央図書館所蔵）

その傍ら、1879（明治12）年に開園した道内最古の公園、函館公園にも植樹します。1891（明治24）年の「樹木献納願」では、同公園について「山を負ひ海に臨み眺望絶佳」ではあるが、「独り花樹に至って未だ其数僅少にして花期尚寂莫の感ある」と述べています。

同年はソメイヨシノ２千本と別のサクラ200本を植えましたが、枯死するものが多く1894（明治27）年にはソメイヨシノ２千本と別のサクラ千本を植樹しました。

さらに、1895（明治28）年には寺社へも苗木を寄付します。函館山周辺は実行寺、高龍寺、常住寺などへ計1550本。函館公園は函館山のふもとですから、函館山一円がソメイヨシノで埋め尽くされたことになります。

亀田川堤防に植えた木々はその後、潮風害により枯死したため同年、ソメイヨシノ1550本を補植しました。

こうした行為を当時の函館新聞は「例年献木するが其志は感心」（1890年４月29日）「実に特志の人なる」（1891年５月５日）と称賛しています。

1897（明治30）年、小右衛門は山や街がサクラ色に染まるのを夢見つつ49歳で亡くなります。残念ながら、函館山と亀田川堤防のソメイヨシノはその後、ほとんどが枯死し定着しませんでした。

一方、函館公園のソメイヨシノは順調に成長し、花見の名所となります。小右衛門が植えたサクラは寿命が尽きて植え替えられましたが、現在もかろうじて２本残っており、130年を超える長い歴史を伝えています。



小右衛門が1891年に植えたとされるソメイヨシノ

小右衛門の死から14年後の1911（明治44）年には函館区会が「故逸見小右衛門氏美挙表彰ニ関スル建議」を行います。そこには小右衛門の功績を後世に伝えるため、函館公園内に碑を建てることを望むと書かれています。

この建議が実現したのは1932（昭和７）年５月。サクラが咲き誇る函館公園で遺族らが出席し「櫻之碑」の除幕式が行われました。碑文には小右衛門の数々の功績が記されています。



小右衛門の顕彰碑

### 啄木の来函は花見時期

日本画家の黒田清輝は1894（明治27）年５月、北海道旅行の途中、函館に立ち寄ります。小右衛門が植樹活動をしていた時代です。日記によると、公園にウメは咲いていましたが、サクラはまだ満開ではありませんでした。

海岸通りで女が野菜のほか「桜の枝を売って歩くのも有り」と書いています。公園のソメイヨシノは植えられたばかりですが、サクラを買い求めることが函館ではすでに春の楽しみだったことがうかがえます。

1907（明治40）年５月５日、歌人の石川啄木が函館に移住します。開花の時期ですが、日記にそのことは記述されていません。また同年の花見を伝える新聞も残っていません。

ただ、２年前の1905（明治38）年５月18日の函館新聞には「函館の春の公園こそ全く稀に見る所の美観」

「公園の花見がてらに散策を試むる老幼男女は殆んど肩摩轂撃の雑沓を極め申候」と書かれています。肩摩轂撃とは人や車がそれぞれぶつかり合う賑やかさを表しています。

この時代、函館公園はサクラの名所となり、人でごった返していました。啄木が身を寄せた歌人仲間の家は、公園のすぐそば。花見に興じる人々がいやでも目に入ったはずです。のどかな岩手県渋民村から出てきた啄木にとって、最初に驚いた光景だったのではないでしょうか。

8月25日には大火が発生し、啄木は勤めていた小学校も新聞社も焼け、札幌への転居を決意します。公園は延焼を免れ、被災者が野宿する場所となりました。




啄木が函館を去り5年後の花見（函館毎日新聞1912年5月13日）

### *電飾華やかな夜桜*

函館公園のサクラ人気を押し上げたのは夜桜でした。1911（明治44）年5月14日の函館毎日新聞は「毎日毎夜の人出多く」と記しており、このころから定着しだしたようです。

その背景には電力会社の思惑もありました。函館で電力が供給されたのは1896（明治29）年。なかなか一般家庭への普及が進まない中、函館水電はＰＲを兼ねて、電灯の飾り付けを行います。

1912（大正元）年には北海道瓦斯が函館でガスの供給を開始。翌年は対抗するかのようにガスの明かりも公園内を彩ることになります。

1914（大正3）年は公園正面入り口に2基のガス灯を設置。一方、函館水電は園内に電線を張り巡らし、サクラを照らすほか、橋の下に600個の電灯を置き、反射鏡でその光を空中に拡散。電極間の放電で光を放つアーク灯も500個設置しました。サクラのトンネルには5色の電光が放たれました。

「桜咲いて春に闇夜はなかりけり」（函館毎日新聞1914年5月4日）といわれるほどでした。

1920年代には、投光器がサクラを照らし出すほか、要所要所にぼんぼりを配置。明治山（摺鉢山）や北海池、噴水塔の周辺は、電球の配色や点滅でショーを演出しました。

函館水電は1913（大正2）年、東北以北初となる路面電車の営業を開始します。花見客の増員を図るため、「梅か桜か桜か梅か　今公園は花盛り」などと車体に書き、街中を走行。さらに、公園では電飾のグレードアップにも努めました。

その結果、夜桜帰り、湯の川行きの電車は夜10時から11時にかけて満員状態となります。1923(大正12)年、花見期間中の乗客数は1日6～7万人と普段の数倍に達しました。



人気を呼んだ函館公園の夜桜（函館毎日新聞1923年5月12日）

### 流行する仮装

公園には仮装する人たちも現れます。函館毎日新聞に登場する先駆けは1915（大正４）年の芸者衆でした。実業家や官庁のトップらを招いた宴会を盛り上げるため、学生や漁夫、僧侶、軍兵、看護婦などに変装し、公園内を練り歩いた後、招待客にお酌をして回りました。

また同年、変装競技大会も開かれました。花火を合図に、１時間以内で互いに変装者を探し、多く見つけた人と発見されなかった人にそれぞれ賞品を贈る趣向でした。

こうした光景に触発され、翌年から奇抜な格好をする団体が相次ぎます。潜水服を着たり、歌舞伎俳優にふんしたり、女装したり、男装したり…。楽隊やはやしで繰り出し、園内は至る所でどんちゃん騒ぎとなります。ハーモニカやバイオリンも鳴り響きます。

夜を徹して酒を酌み交わすため、無礼講が頻発し、中にはけんかも発生します。函館警察署は1922（大正11）年、午前零時以降の歌舞音曲を禁止しました。それでも午前３時過ぎまで人が絶えませんでした。

1924（大正13）年５月11日の函館新聞は、仮装が流行したことで、花見期間中、貸衣装やかつら、化粧などの業者は目が回るほどの忙しさだと書いています。

その一方で、仮装は夜であっても、感じの悪いものは風流な気分をそぐと指摘、「風俗を紊乱（びんらん）するものは、土地の誇りにはならない寧（むし）ろ恥（はじ）である」と憂えています。

### 明かり消えた大火の年

公園周辺には毎年、数十軒の出店が並びました。1923（大正12）年には園内にも出店が認められ、賑わいが一段と増します。近くの末広町商店街はサクラ見物の客を呼び込むため、沿道にサクラを飾り、ぼんぼりを点灯。店ごとに装飾し、売り出しに知恵を絞りました。

こうした華やかさを打ち消す一大事が1934（昭和９）年３月21日に発生した函館大火です。住吉町の民家から発生した火は強風で北へと燃え広がり、全市の３分の１を焼失、啄木が体験した1907（明治40）年の大火を上回る規模となりました。

函館公園も延焼し、サクラは道路沿いを中心に２割ほど被害を受けました。被災した街は花見どころではありません。夜間の電飾は行われず、出店も認められませんでした。

それでも翌年には電飾が復活し、売店も並びます。サクラが春の訪れと、復興の兆しを感じさせてくれたのです。



現在も賑わう函館公園の出店

＜主な参考資料＞


・勝木俊雄「桜」岩波新書、2015年
・浅利政俊「函館山に五万本の桜を植樹した逸見小右衛門と妻ミヨの事績」2019年
・大川相治「逸見小右衛門君伝」北川健之助、1897年
・函館区役所「函館区史」函館区役所、1911年
・神山茂「神山茂著作集　第１集」神山茂著作集刊行会、2003年
・黒田清輝「黒田清輝日記　第２巻」中央公論美術出版、1967年
・函館消防本部「函館大火史」函館消防本部、1937年
・根岸尚代、菅野博貢「函館大火による被災樹および戦災樹の残存状況の把握と探索方法についての一考察」『ランドスケープ研究』80巻５号、2017年